若年受刑者の特性に関する研究（その２）

—特に時間的展望について—

矯正協会附属中央研究所　廣橋　秀山
渕上　康幸*
松村　　猛
東京矯正管区　門本　　泉**

キーワード：若年受刑者の特性，時間的展望，支援的ユーモア志向尺度

１　はじめに

本研究は，若年受刑者の特性を把握し，その処遇に資するために計画された。

第１報告では，ＹＡ級とＹＢ級とについて属性上の違いについて検討し，さらに，懲罰の有無を指標として，所内不適応の原因を探った。

また，未来を考慮して現在の満足を遅延するか，それとも現在を重視するかという時間的展望を指標に，若年受刑者の様々な特徴について検討した。

第２報告では，前回の報告で触れなかった支援的ユーモア志向尺度とネガティブ事象の受容性尺度を用いて，若年受刑者の特性について検討し，これらの尺度と時間的展望（注１）との関係について検討する。

２　方法

(1)　調査実施時期

平成10年10月1日から同年11月1日まで

(2)　調査対象者

本調査の調査対象者は，男子の懲役受刑者で，主たる収容分類がＹＡ級（26歳未満の成人で，犯罪傾向の進んでいない者），ＹＢ級（26歳未満の成人で，犯罪傾向の進んでいる者）のうち，本調査時において，すでに分類調査を終了していた者である。

(3)　調査対象庁

比較的多く若年受刑者を収容している施設に対し，各施設の規模に応じ，在所者数の２分の１から５分の１の比率で調査を依頼する階層非比例標本抽出法（注２）を採用した。特定施設に偏らないようにとの配慮は，施設風土の影響を考慮したものである。

調査対象者の抽出においては，特定の傾向を持った受刑者に偏らないように，称呼番号をもとに一定間隔で対象者を抽出する系統抽出法を採用した。また，調査はあくまで任意であり，調査の協力を拒否した受刑者については，その意志を尊重するようにした。したがって，職員用調査票の記録があっても，受刑者用調査票が白紙となっている場合もありうる。

なお，各庁あたりの対象者数は次のとおりである。

ＹＡ級　５庁
川越少年刑務所 130名（約５分の１）

---

*現新潟少年鑑別所　　**現東京少年鑑別所

奈良少年刑務所　90名（約５分の１）
佐賀少年刑務所　70名（約３分の１）
函館少年刑務所　70名（約２分の１）
松山刑務所　40名（約２分の１）
計 400名

ＹＢ級　７庁

松本少年刑務所　70名（約３分の１）
水戸少年刑務所　70名（約４分の１）

姫路少年刑務所　40名（約３分の１）
佐世保刑務所　70名（約３分の１）
盛岡少年刑務所　60名（約３分の１）
釧路刑務所　60名（約２分の１）
高知刑務所　30名（約２分の１）
計 400名

（注：括弧内の比率は各施設在所者中，同じ分類級受刑者に対するものである。）

(4)　調査内容

調査票は職員用調査票と受刑者用調査票の２種類で構成されている。

(ア)　職員用調査票

次の24項目について，刑務所職員に記入を依頼した。

＜調査項目＞

1　施設番号
2　刑名
3　生年月日
4　入所日
5　刑期
6　罪名
7　入所度数
8　収容分類級
9　反社会的集団所属の有無
10　本件共犯の有無
11　ＩＱ相当値
12　ＭＪＰＩ粗点
13　自殺未遂歴
14　薬物乱用歴
15　配偶者関係
16　身元引受人の有無
17　最終学歴
18　入所前職業の有無
19　施設歴
20　調査時現在の累進級
21　入所時から調査時までの懲罰回数
22　調査時現在の等工
23　仮釈放申請に係る面接実施状況
24　その他特記事項

(イ)　受刑者用調査票

全部で74問からなる質問紙を用いた。質問は次の9種類の尺度で構成されている。

①　未来考慮尺度

渕上・出口（1996）によるもので，「将来のことをあれこれ空想するのが好きである」など，現在の行動を決定する際に，将来のことをどれくらい考慮するか，ということに関する内容の14問で構成される。回答は，「そのとおり」「まあそのとおり」「どちらともいえない」「ややちがう」「ちがう」の５つの回答の中から選ぶ5件法になっている。（注３）この尺度は非行少年を対象に作成されており，今回，若年受刑者に実施するのに際して，内容を変えない程度に表現を改めた。なお，本尺度はAlan（1994）のConsideration Future Consequences（以下，ＣＦＣと略記）を参考に作成されたものである。

②　時間的指向性尺度

白井（1989）によるもので，「あなたにとって過去・現在・未来のうち最も大切なのはいつですか。また，その理由も書いてください」と教示し，過去・現在・未来のうちから１つを選択し，その理由を記述するよう求め，選択理由の記述を白井の基準によってカテゴリー化し，それに基づき，ポジティブな未来指向，ネガティブな未来指向，ポジティブな現在指向，ネガティブな現在志向，過去指向の5タイプに分類される。

③　時間的信念尺度

白井（1993）によるもので，「どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない」

などの時間的展望に対する個人的価値体系に関する内容の12項目で構成され，回答は5件法になっている。

④　ローカス・オブ・コントロール尺度

鎌原・樋口・清水（1982）によるもので，「幸福になれるか不幸になるかは，努力しだいだ」などの18問で構成され，回答は5件法になっている（注４）。ある出来事を自分自身の行動の結果であると認知するか（内的統制），それとも，自分が制御できない外的要因に起因すると認知するか（外的統制）を測るものである。得点が高いほど内的統制（Internal）であることを示す。

⑤　支援的ユーモア志向尺度

宮戸・上野（1996）によるもので，「気がめいるようなときでもユーモアで自分を励ます」など８問で構成され，回答は５件法であり，得点が高いほど支援的ユーモア志向が高いことを示す。先行研究では，支援的ユーモアには，ストレス緩和効果があり，精神的健康を維持・促進するといわれている。

⑥　ネガティブ事象の受容性尺度

⑤と同様に，宮戸・上野（1996）によるもので，「物事には失敗がつきものだ」など10問で構成され，失敗やネガティブな事象に対して動揺して自分を見失うことなく，感情的な現実拒否や自己卑下などを起こさないで余裕を保つことができる程度を測定する項目である。回答は５件法であり，得点が高いほど，ネガティブな事象に対する受容性が高いことを示す。

ネガティブ事象の受容性と支援的ユーモア志向は相互に関連があると考えられている。すなわち，「支援的ユーモア志向性は，自己客観視や自己洞察を伴う成熟した人格の特徴のひとつとして考えられている。そうしたユーモアが，ネガティブ事象において主体性を失うことを防ぎ，平静さや落ち着きへのきっかけを与えると考えられている（引用：1996，宮戸・上野）。」

⑦　自尊感情尺度

Rosenberg（1965）によるもので，「だいたいにおいて，私は自分に満足している」など自尊心に関する内容の10問で構成され，回答は「そのとおり」「まあそのとおり」「すこしちがう」「ちがう」の４つの回答の中から選ぶようになっている（注５）。

⑧　職業意識に関する質問

総務庁青少年対策本部が継続して実施している青年意識調査「世界の青年との比較からみた日本の青年」からの抜粋で，“働く目的”，“転職についての考え方”を問うもので，回答は選択肢から１つだけ選ぶものである。

⑨　受刑意識に関する質問

片倉他（1998）による受刑意識に関する質問項目で，最近の体調，受刑生活の満足度，職員との会話量，職員の理解度，刑務所の規律厳格度，他の受刑者との関係について，それぞれ5件法で評定させた。

なお，上の①③④尺度の44項目の質問は，回答に及ぼす項目間の影響を考え適宜分散して配列した。質問文の詳細については前回の報告の論文末を参照されたい。

３　結果と考察

(1)　支援的ユーモア志向尺度得点の検討

ユーモア感覚を持つことで，日常生活上様々なストレスを緩和できるということは，一般にもよく理解されるところである。

上野（1992）は，従来のユーモアに関する研究を整理した結果，「ユーモアは，『遊戯的ユーモア』，『攻撃的ユーモア』，『支援的ユーモア』の３種に分類している。遊戯的ユーモアは，自己や他人を楽しませるため，攻撃的ユーモアは自己や他者を攻撃するため，支援的ユーモアは，自己や他者を励まし，許し，心を落ち着けるためのユーモアである。この３種のユーモアのうち，ストレスを緩和し，精神的健康状態と関連するユーモアが支

援的ユーモアであると考察している。

受刑者の持つこの支援的ユーモア志向はどのようなものだろうか。宮戸・上野（1996）の支援的ユーモア志向尺度と，施設内適応及び時間的指向性との関連を見て行く。

まず，支援的ユーモア志向尺度の平均値を分類級別に比較したところ（表１），ＹＡ級は20.4点，ＹＢ級は20.8点であり，両群の間に差は認められなかった（t＝.75，df=787，p>.1）。犯罪性の進度によって，ユーモア感覚を持って精神的な健康を維持して行こうという構えが異なるとは言えないことが示された。

ア　支援的ユーモア志向と所内適応

支援的ユーモア志向は，受刑生活への適応にどのように影響しているのだろうか。対象となった受刑者全体を懲罰の有無別に２分し，支援的ユーモア志向尺度得点の平均値を比較したところ（表２），懲罰の有無では差は認められなかった。これは，懲罰が２回以上と１回以下の群で分けても同様の結果であった。つまり，支援的ユーモア志向性を有しているかどうかは，「規律違反」という行動にそのまま反映されるとは限らないということが明らかになった。

次に，より内面の適応指標として，受刑生活への満足度，自尊心に着目し，支援的ユーモア志向尺度との関係について検討した。支援的ユーモア志向尺度の平均値で受刑者を２群に分け，受刑生活への満足度に関する評定及び自尊心得点を比較した（表３，表４）。その結果，受刑生活の満足度では有意な差はなかったが，自尊心得点においては，有意な差が認められた（t=25.5，df=776，p<.01）。すなわち，支援的ユーモア志向尺度の得点が低い群よりも高い群の方が，自尊心得点が高かった。支援的ユーモアを使って，ストレスを乗り越え，精神的な健康を保とうとする受刑者は，そうでない者に比べて，自尊心が高いと言える。

表１　支援的ユーモア志向尺度の分類級別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
ＹＡ級	20.4	6.08	394	-0.75
ＹＢ級	20.8	6.49	393	

表２　支援的ユーモア志向尺度の懲罰有無別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
懲罰なし	20.5	6.29	453	-0.10
懲罰あり	20.7	6.28	334	

イ　支援的ユーモア志向尺度と時間的展望

(ア)　時間的指向性

時間的指向性と支援的ユーモア志向との関連を見た。「過去・現在・未来のうち最も大切なのはいつですか」という問に対する回答別に，支援的ユーモア志向尺度の得点を比べた（表５）。その結果，３群の間に差があるとは言えなかった。

(イ)　未来考慮

未来を考慮して現在の満足を遅延する態度と，支援的ユーモアの関連を見た。第１報告

表３　受刑生活の満足度の支援的ユーモア志向高低別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
低ユーモア	1.8	0.95	393	0.03
高ユーモア	1.8	0.95	392	

表４　自尊感情尺度の支援的ユーモア志向高低別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
低ユーモア	24.5	5.25	388	25.5**
高ユーモア	26.4	5.34	388	

** p<.01

表５　支援的ユーモア志向尺度の時間的指向性別比較

	平均値	標準偏差	人員	F 値
過去	21.3	5.51	28	0.95
現在	20.3	6.34	469	
未来	20.9	6.27	288	

で述べたように，若年受刑者の未来考慮は「現在優位」「建設的未来優位」「空想的未来優位」の３つの下位尺度に分かれる。

支援的ユーモア志向尺度の平均値で受刑者を2群に分け，現在優位得点，建設的未来優位得点，空想的未来優位得点を比較した（表６，表７，表８）。その結果，現在優位得点では有意な差はなかったが，建設的未来優位（t=10.79，df=780，p<.01）及び空想的未来優位得点（t=39.81，df=781，p<.01）においては，有意な差が認められた。

すなわち，支援的ユーモア志向尺度の得点が平均値よりも高い群の方が，未来優位得点が高かった。支援的ユーモアを使って，ストレスを乗り越え，精神的な健康を保とうとする受刑者は，そうでない受刑者に比べて，建設的であれ，空想的であれ，将来を考慮して現在の満足を遅延する態度を有することが明らかになった。

(2) ネガティブ事象の受容性尺度得点の検討

困難や失敗などのネガティブな事象への耐性により，所内適応や時間的指向性がどのように変わってくるのだろうか。

ネガティブ事象の受容性尺度の得点を，分類級間で比較したところ（表９），ＹＡ級は25.5点，ＹＢ級は24.2点であり，両群の間に差が認められた（t＝13.39，df=787，p<.01）。すなわち，ＹＡ受刑者の方がＹＢ受刑者よりも，困難や失敗といったネガティブな事象に対しても，動揺したり自分を見失ったりしない余裕を持つことができることが示された。

ア　ネガティブ事象の受容性と所内適応

こうしたネガティブ事象の受容性は，受刑生活への適応にどのように影響しているのだろうか。対象となった受刑者を懲罰の有無別で２分し，ネガティブ事象の受容性尺度得点を比較したところ，得点に差はなかった（表10）。これは，懲罰が２回以上と１回以下の群に分けても同様の結果であった。

次に，より内面の適応指標として，受刑生活への満足度と自尊心に着目し，ネガティブ事象の受容性尺度との関係について検討した（表11，表12）。その結果，受刑生活の満足度では有意な差はなかったが，自尊心得点に

表６　現在優位得点の支援的ユーモア志向高低別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
低ユーモア	16.9	4.02	392	1.60
高ユーモア	16.6	4.09	386	

表７　建設的未来優位得点の支援的ユーモア志向高低別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
低ユーモア	21.3	3.83	390	-10.79**
高ユーモア	22.1	3.34	390	

** p<.01

表８　空想的未来優位得点の支援的ユーモア志向高低別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
低ユーモア	6.3	2.28	390	-39.81**
高ユーモア	7.4	2.50	391	

** p<.01

表９　ネガティブ事象の受容性尺度の分類級別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
ＹＡ級	25.5	5.11	394	13.39
ＹＢ級	24.2	5.17	393	

** p<.01

表10　ネガティブ事象の受容性尺度の懲罰有無別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
懲罰なし	25.0	5.24	452	1.18
懲罰あり	24.6	5.09	335	

表11　受刑生活の満足度のネガティブ事象の受容性高低別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
低ネガティブ受容	1.8	0.92	375	0.39
高ネガティブ受容	1.8	0.96	410	

おいては，有意な差が認められた（t=8.48, df=775, p<.01）。

すなわち，ネガティブ事象の受容性得点が高い群の方が，低い群よりも自尊心得点が高かった。ネガティブ事象への受容性がある受刑者は，そうでない者に比べて，高い自尊心を持っている受刑者と言える。

イ　ネガティブ事象の受容性尺度と時間的展望

(ア)　時間的指向性

ネガティブ事象の受容性と時間的指向性との関連について検討した。上述のように「最も大切な時間」として選んだ時間的指向別に，ネガティブ事象の受容性尺度の得点を比べた。その結果，３群の間には差があると判断され（F=9.75, df=２, p<.01），多重比較（LSD法）で，さらに詳しい検討をしたところ（表13），「未来」を選んだ者の方が「現在」を選んだ者よりも，ネガティブ事象の受容性得点が高かった。

表12　自尊感情尺度のネガティブ事象の受容性高低別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
低ネガティブ受容	24.9	5.42	371	8.48**
高ネガティブ受容	26.0	5.29	404	

** p<.01

表13　ネガティブ事象の受容性尺度の時間的指向性別比較

	平均値	標準偏差	人員	F値
過去	26.0	5.22	28	9.75**
現在	24.2	5.01	469	
未来	25.8	5.27	288	

** p<.01

表14　現在優位得点のネガティブ事象の受容性高低別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
低ネガティブ受容	16.2	4.28	373	14.50**
高ネガティブ受容	17.3	3.81	405	

** p<.01

(イ)　未来考慮

未来を考慮して現在の満足を遅延する態度と，ネガティブ事象の受容性の関連を見た。第１報告で述べたように，若年受刑者の未来考慮は「現在優位」「建設的未来優位」「空想的未来優位」の３つの下位尺度に分かれる。

ネガティブ事象の受容性尺度の平均値で受刑者を２群に分け，現在優位得点，建設的未来優位得点，空想的未来優位得点を比較した（表14，表15，表16）。その結果，現在優位得点に有意差が認められた（t=14.5, df=778, p<.01）。

すなわち，ネガティブ事象の受容性尺度の得点が平均値よりも高い群の方が，現在優位得点が高かった。

ネガティブ事象においては，現在優位で目前の課題処理に専心したり，「そのうちなんとかなるだろう」と楽観視して未来を考慮しないでいることが，暗い未来に失望し，抑うつ状態に陥ることを防ぎ，ひいては精神的健康を維持・促進することに繋がると考えられる。

(3)　支援的ユーモアとネガティブ事象の受容性の関連

宮戸・上野（1996）によれば，支援的ユーモア志向がネガティブ事象への耐性に影響を与え，精神的な健康を維持させるという。両尺度の得点の関連性を見たところ，r＝.27（p<.01）のやや低い相関が認められ，緩やか

表15　建設的未来優位得点のネガティブ事象の受容性高低別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
低ネガティブ受容	21.8	3.60	371	1.13
高ネガティブ受容	21.5	3.67	408	

表16　空想的未来優位得点のネガティブ事象の受容性高低別比較

	平均値	標準偏差	人員	t 値
低ネガティブ受容	6.9	2.62	373	0.18
高ネガティブ受容	6.8	2.34	408	

な関係が認められた。一般大学生を対象にした宮戸・上野（1996）による結果より，やや結び付きは緩やかといえるが，支援的ユーモアを用いて自分の精神的健康を維持しようとする構えを持つ若年受刑者は，ネガティブ事象に対する耐性も有している傾向があった。

以上の結果を踏まえると，支援的ユーモアを用いる若年受刑者は，そうでない受刑者よりも困難や失敗などのネガティブな事象に対して耐性を有している傾向があり，受刑生活の中でも，比較的高い自尊心を有しているといえる。そして，こうした受刑者は，自分にとって重要なのは，「現在」よりも「未来」であると考えていた。しかし，ネガティブな事象に対する耐性を有している者は，現在優位の構えを持っていた。未来が重要と考えつつも，ネガティブな事象下においては，目前の課題処理に専心したり，「そのうちなんとかなるだろう」と楽観視して未来を考慮しないでいることが，暗い未来に失望し，抑うつ状態に陥ることを防ぎ，ひいては精神的健康を維持･促進することに繋がると考えられた。

引用文献・参考文献

Alan Strathman, Faith Gleicher, David S.Boninger, and C. Scoot Edwards "The Consideration of Future Consequence : Weighing Immediate and Distant Outcomes of Behavior" Journal of Personality and Social Psychology, 1994, Vol.6. No.4.7 42-752

渕上康幸・出口保行　1995 CFC尺度を用いた非行少年の行動傾向についての一考察(1)　犯罪心理学研究第33巻特別号　142-143

溝上瑞男ら　1976　犯罪傾向の進んだ若年受刑者の処遇に関する研究　法務総合研究所紀要19号　61-89

平田光史・嶋田博・三好隆行・屋崎英典　1984　ＹＢ級施設における暴力団関係者の特性について　矯正教育35巻３号　42-47

勝俣英史・篠原弘章・井上みどり　1982　非行少年の時間的展望－少年鑑別所収容少年の場合　熊本大学教育紀要人文科学第31号　267-277

金子幾之輔・永井君子・高田明子・寺崎武彦・浦田洋　1985　若年受刑者の再犯過程に関する研究　犯罪心理学研究23巻特別号　102-103

片倉庸介・長谷川宜志・渕上康幸・松村猛・水上好久・中勢直之・門本泉　1998　外国人受刑者の受刑態度に関する研究(その１)　中央研究所紀要第８号　11-40

河合弘靖　1993　最近の若年受刑者の特質について　矯正教育研究38巻　129-134

鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治　1982 Locus of Control尺度の作成と，信頼性，妥当性の検討　教育心理学研究第30巻　302-307

小島賢一　1982　若年受刑者の学力について－その特徴－　犯罪心理学研究19巻特別号　13-14

水口禮治　1993　適応と社会心理学的心理療法－コントロール・トレーニングの理論と技法　駿河台出版社

宮戸美樹・上野行良　1996　ユーモアの支援的効果の検討―支援的ユーモア志向尺度の構成―　心理学研究第57巻第４号　270-277

上野行良　1992　ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について　社会心理学研究，7，112-120.

大川力・渕上康幸・門本泉　1998　非行少年の自己意識に関する研究（その１）　中央研究所紀要８号　63-78

尾上一水・瓦井保・高橋清介・阿南武士　1979　ＹＢ級受刑者の不良傾向について　矯正教育30巻４号　57-60

Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton Univ. Pre.

杉山成　1994中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性　教育心理学研究第42

巻第４号　415-420
白井利明　1989　現代青年の時間的展望の構造(1)－大学生と専門学校生を対象に－　大阪教育大学紀要（第Ⅳ部門）38巻　21-28
白井利明　1991　青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連　心理学研究第62巻第４号　260-263
白井利明　1993　時間的信念尺度の検討に関する研究　大阪教育大学紀要（第Ⅳ部門）42巻　51-57
白井利明　1997　時間的展望の生涯発達心理学　剄草書房
総務庁青少年対策本部　1998　日本の青少年の生活と意識－青少年の生活と意識に関する基礎調査報告書－
竹田収　1987　若年受刑者の従属・同調性について　犯罪心理学研究25巻特別号　114-116
都筑学　1998　大学生の卒業後の進路の決定・未決定と時間的展望　日本心理学会大会論文集　ｐ48
都筑学　1999　大学生の時間的展望－構造モデルの心理学的検討－　中央大学出版部
土屋　守・山下武子・竹石正博・久保貢・竹田収　1985　若年受刑者のヤクザ観について　犯罪心理学研究23巻特別号　100-101
浦田洋・中川猛・土屋守・永井君子・吉田研一郎　1986　受刑に対する受け止め方について－初犯若年受刑者を対象として－　犯罪心理学研究24巻特別号　124-125

＜備考＞

注１：展望とは，辞書的には景色や物事などを広く見渡すことである。時間的な展望は今在る自分を基盤に時間的に離れた将来について，省察したり洞察したりして見渡すことであり，人の起こした行動を理解したり，これから起こすであろう行動を予測する上で重要な概念とされる（松田他，1996)。ただし，心理学における時間的展望の概念はかなり拡張されており，単にパースペクティブ（展望）に留まらなくなっている。白井（1994）は時間的展望を更に４つの下位概念（狭義の時間的展望，時間的態度，時間的指向性，狭義の時間知覚）に分類しているが，本研究でいうところの時間的展望は，この時間的指向性（time orientation）に該当する。

本研究で採用した未来考慮はAlan（1994）のConsideration Future Consequencesの概念によるものである。

注２：階層非比例標本抽出法は，サンプル全体の中で各層の対象者の占める割合が，母集団に対するその層の比に必ずしも等しくせずに抽出する方法である。この方法は，関心のある調査対象者の数が相対的に少ないときに有効であるとされる。

注３：未来考慮尺度14項目について，「そのとおり」を５点，「ちがう」を１点として集計した。平均±１標準偏差の値が得点範囲（１点から５点）を超える不良項目は存在しなかったため，すべての項目を因子分析に持ち込んだ。共通性の初期値を１とし主因子法バリマックス回転によって３因子を抽出した。α信頼性係数は，第１因子が0.726，第２因子が0.653，第3因子が0.566であった。

注４：ローカス・オブ・コントロール尺度の全項目のα係数は0.725であった。

注５：自尊感情尺度を因子分析したところ，項目８の「もっと自分を尊敬できるようになりたい」のみが第１因子から除外され，α係数についても，この項目を除外した場合の方が高かった。大川他（1998）の少年鑑別所在所少年を対象とした研究においても，同様の理由から，この項目を除外し，９項目の合計を自尊感情得点としており，本研究においても９項目の合計を自尊感情得点とすることと

した。なお，９項目の時のα係数は，0.834
であった。